

## ネット時代の実名の重み

石原 燃

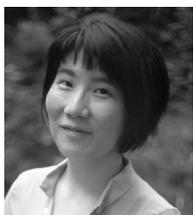
2023年3月、死産した双子の嬰兒を自宅に遺棄したとして、死体遺棄の罪に問われていたベトナム人の元技能実習生に、最高裁が逆転無罪判決を言い渡した。

彼女は罪に問われるべきことを何もしていないにもかかわらず、2年以上も裁判を闘わなくてはならなかった。その上、逮捕時の報道が従来と比べても大きく、ベトナムでもセンセーショナルに報じられたことによって、本人だけでなく家族までもが激しいバッシングにさらされた。今回、無罪を勝ち取ったことで名誉回復がなされると思うが、ネット上の古い情報やデマをすべて消し去るのは難しい。

毎年毎年、似たような事件は何十件も起きていて、逮捕された人の実名や写真が載った記事を見るたびに暗澹たる気持ちになる。中には嬰兒を殺害してしまったケースもある。けれど、必要な制度にたどりつけぬまま、追い詰められてしまった末のことだ。その責任は社会の側にある。たったひとりで、孤立出産に至るということは、もうそれだけで想像を絶する大きな傷を負うことだ。その上さらに、ネット上に名前をさらされ続ける罰を与えられなくてはならないのだろうか。

そもそも、保護が妥当なのに逮捕されてしまうのが問題なのだと思う。無理解な病院が通報してしまうケースもあるという。警察に逮捕だと言われたら、報道しないわけにもいかないのだろう。とはいえ、報道というものは本来、権力に追従するものではないのだから、警察や病院が変わるのを待たずに、こういったケースで実名・顔出しの必要があるのか、せめて事件の詳細がわかるまでだけでも仮名にできないのか、先陣を切って検討してもらいたい。

孤立出産そのものは罪ではない。孤立出産に追い込まれたその人は被害者だ。報道によって彼女たちを追い込んでも、その将来をさらに厳しくすることにはかならない。彼女たちの将来をどうか潰さないでほしいと願う。



### PROFILE

いしはらねん：劇作家。小説家。2010年、『フォルモサ!』が劇団大阪創立40周年戯曲賞大賞を受賞。2011年には短編『はっさく』が「震災SHINSAI: Theaters for Japan」で取り上げられた。2020年に自身初の小説『赤い砂を蹴る』が第163回芥川賞候補、2023年に中絶薬を飲む一夜を描いた戯曲『彼女たちの断片』が第67回岸田國土戯曲賞候補となる。その他の作品に、男性の性暴力被害者を描いた戯曲『蘇る魚たち』など。